

徳島国際映画祭クロージング映像

DRUM'N'ROLL

ドラムロール

シナリオ

人物

堤真司(29歳) 無職

まじめで温厚、努力は必ず報われると信じてきた男。でも今はちょっとひねくれてる、元・善なる男。真面目に真摯にをモットーに仕事に打ち込んでいたが大きなミスをして、初めての挫折に全体的に鬱っぽくなり、心を病む。

逃げるようにお遍路へ。やたら声が良い。

華山ハナ(88歳) ゲストハウス・オーナー

ボケてるのかボケてないのかギリギリのラインで、次々に奇怪な行動を繰り広げるトリックスター。人を驚かせるのが大好きで、常に非日常を求めている。

今は YouTuber になるのが夢で、「婆が作ってみた！」でいろんなものを作るのが趣味。

華山かおる(20歳) 高校三年生

ハナの孫。

家を出て、外の世界を見たい。そのために、姉に婿を迎え入れ、地元に残って欲しい。親に内緒で東京へ行くために、とりあえず婆の宿でバイトを始める。

田原俊宏(46歳) 教師

数学を担当。

バリバリの団塊ジュニア。16歳の娘がいる。

教師一筋だったため、世界観が狭量。

休日はお遍路を回って、同じお遍路さんに偉そうなことを言うのが趣味。

加藤(?歳)?

ハナが経営するゲストハウスに予約を入れた男。

正体は不明。

ハナは自分がかつて思いを寄せていた男だと信じているが……?

01：山道

昼下がり山道。山道は険しく、鬱蒼としている。一人の男が、大きなリュックを背負って、足を少し引きずりながら歩いている。男はいわゆるお遍路さんのような服装をしているわけではなく、トレッキングか旅人か、というような服装をしている。手に持った金剛杖だけが、かろうじてお遍路を回っているのだと主張している。曇り空のため日差しは弱い、帽子を目深にかぶっている。歩くことに集中している。汗を拭うために帽子を取ると、あたりに人がいなくなっていることに気づく。男はキョロキョロとまわりを見渡し、スマートフォンを取り出すが、電波が届かないようだ。しばらくの間、ちょこちょこ歩き回ったり、中空にスマートフォンをかざしたりするも、結局電波はつながらない。

堤 「まいったな」

ぶつぶつとつぶやきながら、ポケットから古い折りたたみの地図を取り出す。

その瞬間、空からの雨の滴が地図を濡らす。

男は地図を畳み、道の奥へと走り出していく。

02：ゲストハウス・中

山奥にある古い民家。

一見すると普通の家なのだが、よく見ると入り口に小さな看板が取り付けられている。

看板には、「GUEST HOUSE M(CASA)」と書かれている。

学生服の少女がかばんを頭の上で傘にしながら、道着のようなものを肩から下げて、民家の中に走って飛び込んで来る。

かおる 「ただいまー」

少女はポケットからハンカチを取り出して制服を拭きながら、あーとかもーとか言っている。

かおる 「おばあちゃん？ タオル、とってくれない？」

少女は中に大きく声をかけるが、返事はない。

少女は諦めて濡れたまま民家の中に入っていく。板の間に水滴が垂れる。

台所を覗くが婆の姿はない。

走ってきて喉が渴いたのか、冷蔵庫を開けて、スポーツドリンクのペットボトルを取り出し、グラスに注ぎ、飲む。

束の間、ブホッ！と吐き出し、激しく咳き込む。

かおる 「な、なにこれなにこれ？ え？ なんて？」

いつの間にか背後に婆が立っており、くつくつと笑っている。

かおる 「うわ、おばあちゃん、びっくりした！」

婆 「まっこと面白かったぜ」

かおる 「ちょっと、なによ、これ？ いや、なによその服、お姉ちゃんのじゃん」

婆は、年齢にそぐわない若い女子のような格好をしている。

婆 「勝負服だぜ」

婆は色っぽく胸元を強調する。いやに巨乳に見える胸元から、天恵菇（てんけいこ／大きな椎茸）がはみ出ている。

かおるはそれにまたもやびっくりしながら、婆を睨みつける。

かおる 「食べ物で遊ばないの」

婆 「かおるは驚かせがいがあるけん、ええな。ほれ、風邪引くぞ、風呂入ってこい。露天風呂。沸かしてあるから。」

かおる 「露天風呂って」

婆 「嘘はついてないぜ」

婆はにやりと笑っている。

03：昼・あちこち

かおるが風呂の方に行ってしまうと、婆は居間にあるラジオをつけて、チューニングを合わせる。

ラジオ 「——日の徳島の天気は午後から強い雨になるでしょう——」

ラジオ 「——ロナのエースストライカーが行方不明——」

ラジオ 「（不明瞭な外国語）（ノイズに紛れる不気味な声）」

しばらく合わせていくと、ノイズの中から不安定な音楽が聞こえてくる。

雨の中を歩くリュックの男、堤。

お遍路さんの格好をしてやってくる中年男性・田原。

大きな肉塊を猟奇的にさばく婆。

ドラム缶の五右衛門風呂に入っているかおるのセクシーショット。

かおるが顔を上げると、不穏な雲が広がっている。

ポロっちい古民家のシルエット。

タイトル「ドラムロール」

音楽が終わると、ラジオのニュースが始まる。

ラジオ 「緊急ニュースです。ただいま入った情報によると、先日詐欺容疑で指名手配された男が四国遍路に紛れて

——

ラジオのニュースはノイズに飲み込まれる。

04：夕方・宿

風呂からあがったかおるが、居間で、机の上に積まれたタオルに頬を預けて眠っている。

サーっと雨音が聞こえているような気配がする。婆は台所にいるのか姿が見えない。

客がやって来る。
かおるは寝ぼけてフガフガしながら、タオルを持ってお出迎える。
中年の男がお遍路の格好をしてやってくる。

かおる 「いらっしやいませ」

田原 「こんばんわ、あの、予約をした——」

かおる 「あ、加藤さん？」

かおるはうれしそうに尋ねる。

田原 「いや、田原です。田原俊宏。一泊で予約した(嫌にキリッとカッコつけて)」

かおる 「ああ、田原さんの方か」

田原 「方？」

かおる 「はい、どうぞ(タオルを渡す)」

田原 「え？ ありがとう」

かおる 「あれ？ 降ってませんでした？ 雨」

田原 「ああ、一回降ったんだけど、もう止んだみたい。また降るみたいですけどね」

かおる 「ふーん、あ」

かおる、ラジオのボリュームを下げると、雨音のように聞こえていたラジオのホワイトノイズが消える。

かおる 「ラジオでした」

田原 「ああ」

かおる 「こんな僻地まではるありがとうございます」

田原 「いえ、こちらこそ」

かおる 「実はうちの、初めてのお客様でした」

田原 「え？ そうなんですか、それは驚きだ」

かおる 「わたしも驚いています」

田原 「？」

かおる 「こんなところに本当にお客さんが来るんだって」

田原 「まあ」

かおる 「だってここ、お遍路宿でもないし、私が言うのもなんだけど、何しにこんなところに」

田原 「まあ」

かおる 「なんかあれですか？ 身を隠してる的な？」

田原 「いやいや」

かおる 「(なんとなくチラチラ見てくる田原をいぶかしんで) もし、そういうアレでも、私、超強いんで」

田原 「え？」

かおる 「一応、カポエラとかやっていますよ」

田原 「隠してないですよ、何も」

かおる、田原の頭を見ながら、ちょっとだけカポエラみたいなステップを踏む。

田原 「はあ。(話題を変えるように) でも、初めてのお客って言う割には、ずいぶん——」

かおる 「ああ、ずいぶん年季入ってますよね」

田原 「(気を使って) 趣が」
かおる 「古民家風っていうよりも、ただの古民家なんで、築65年だそうです」
田原 「それは——趣いてますね」
かおる 「そもそもまったく改装もしてなくて。私とお姉ちゃんの部屋もまだあります」
田原 「おも、しろいですね」
かおる 「今日、田原さんに泊まっていたくのは、去年亡くなった元・おじいちゃんの部屋です」
田原 「それはちょっと重いな」
かおる 「そのまんまになってますので」
田原 「そのまんま？」

田原、小走りに駆け、かおるが案内してくれた部屋の扉をガラッと開けると「わ、そのまんまだ、元は知らないけど」とつぶやく。

田原、入るのをためらい、一旦居間の方に戻って来て

かおる 「でも、ほらそこ、露天風呂はね、オーナーの手作りなんですよ、すごいでしょ」
田原 「へえ、手作りの露天風呂か」
かおる 「脱衣所も手作りなんですよ」
田原 「オーナーって、元々建築士かなんかだったんですか？」
かおる 「いや、趣味ですネ、たぶん」
田原 「ほう……。そういうのって、良いんですか？」
かおる 「なにがですか？」
田原 「違法建築とかにならないのかな？」
かおる 「なるんですか？」
田原 「さあ。たぶん」
かおる 「お風呂も？」
田原 「たぶん」

かおる、婆がいると思わしき、台所の方を見やる。

田原 「ちなみに……旅館業の許可とかって取ってますよね」
かおる 「いや、はい、たぶん……」
田原 「たぶん……どっち？」
かおる 「えーと、だいじょうぶです。いざとなれば」
田原 「役所の人とかには……？」
かおる 「最悪、アレ、壊せば大丈夫ですよネ」
田原 「壊すって」
かおる 「あ！ 最悪タダで。タダにします。たまたま泊まりに来たってことで」
田原 「たまたま？」
かおる 「だって、ほら、自宅ですよ？ どっからどう見ても。これが宿に見えますか？」
田原 「見えないですけど」
かおる 「とりあえず誰もいないうちに一番風呂入ってください！」

かおる、田原の背中を押すと、ハナ婆が血まみれのエプロンをして台所から現れる。

田原 「うわあ！」

婆 「ひっひっひ」

かおる 「あ、オーナーの、祖母です」

田原 「噂の」

婆 「オーナーの華山ハナです」

かおる 「あ、孫の、同じく華山です」

田原 「？」

婆 「あんたが、加と——」

田原 「いえ、田原の方です、お世話になります」

婆、チットつまらなそうに

婆 「ようこそ、ここが注文の多い料理店です」

田原 「じゃあ今日はほくが？」

婆 「もし役所に密告したら」

かおる 「おかずになりますよ」

婆 「煮込む時に、溶けちゃうから、それ外しといてな」

婆は田原の頭部に視線を送り、くつくつと笑う。

かおる 「さき、お部屋へどうぞ」

婆 「自宅だと思って寛いでくれ」

田原 「自宅って」

田原はひとまず荷物を置きに元・おじいちゃんの部屋に入る。

田原 「ほんとにおじいちゃんの部屋だよ」

田原 「ベッド、電動で動くやつだよ」

ウイーンと音がして、背もたれが持ち上がる。

05：夕方・宿

田原は五右衛門風呂に入っている。カッラを取ったのか、先ほどの髪型とは違って、ずいぶん頭髪が寂しく見える。

田原 「露天風呂って」

田原は特段嫌そうでもなく、楽しそうに歌を口ずさんでいる。(♪禿げた頭隠すの、案外下手だね〜など) 脱衣所のカゴの中には、カッラのようなものが置かれている。

「バスタオルはこちらをご使用ください」と書かれたカゴは空っぽになっている。

居間ではかおるが、バスタオルを畳みながら寝落ちしているようだ。

畳んだバスタオルを枕にして眠っている。

しばらくすると、びしょ濡れの堤が入り口の扉をあけて入ってくる。

堤 「なんだよこの雨……俺がなにか悪いことでも……ああ、したか。したか。した」

堤 「すみませーん！ 誰か、誰かいますか？」

お風呂場の方からも声が聞こえる。お風呂場にタオルが全くなかったようで、全裸の田原が脱衣所から半身を乗り出し、先ほどもらった小さなタオルで股間を抑えて右往左往している。

田原 「後で持って行くっていったのに……すみませーん！ 誰か、誰かいますか？」

かおるは眠っている。

堤 「すみませーん……誰もいないのか」

田原 「すみませーん……まったく」

二人はそろそろと、居間の方に向かっていく。

びしょぬれの堤と、禿げ上がって落ち武者みたいになっている田原が居間で鉢合わせして、ふたりとも驚く。びっくりした田原は、小さなフェイスタオルをハリリと落とすが、股間をカツラで隠しているのでことなきを得る。

堤 「うわー！」

田原 「うわー！」

その声を聞いて、かおる「うわー！」と飛び起きる。

全裸の田原を見て、「おおお？」とおのき、ケイシャーダ（後ろ回し蹴り）を繰り出そうとするが、気づいて――

びっくりした田原は股間を隠していたカツラも落としてしまふ。

かおる 「うわー！ あ、ごめんなさい、タオル、私だ。」

かおるはタオルを投げるように二人に渡し、田原は落としたフェイスタオルを拾い、頭に乗せて風呂場に戻っていく。

かおる 「加藤さんー!？」

堤 「え、いや、違います。加藤さんじゃなくて、あの、今日ってここ空いていますか？ 泊まれるかな。そもそもここは宿？ ですよね？」

かおる 「えーと、ごめんなさい、家みたいに見えるけど、いやほとんど家なんですけど、宿です。宿なんですけど今日満室で……」

堤 「そうなんだ……。じゃあ、ちょっと雨宿りだけさせてくれませんか？ 外、すごい雨で」

かおる 「ほんとだ、すごい雨。」

堤 「山道、ちょっとすべっちゃって。足くじいちゃって」

かおる 「大変。でもなんでまたこんなところに」

堤 「え？ まあたまたまですけど」

かおる 「たまたま……（かおるは堤の股間を凝視する）」

堤 「はい、そうなんです、たまたま」

かおる 「（我にかえり）でもここ来るの大変だったでしょ。国道から近いように見えて、歩くところ時間とかかかるし」
堤 「めちゃくちゃ道も険しいですよ」

かおる 『お遍路転がし』って言われてて、昔はお遍路道だったみたいなんですけど、こっちはもう誰も歩かなくなっ

堤 「あれ、そうなんだ。この宿は昔から？」
かおる 「いや、こないだオーブンしたばかりなんです。あなたはお客さん第二号」
堤 「こないだ？ それにしては」
かおる 「自宅みたいに寛げる、がコンセプトですから。ちょっと待っててくださいね。オーナーに泊まれるか聞いてきます」
堤 「ああ、ありがとうございます」

06：夕方・台所

かおるは厨房にいる婆に堤のことを伝える。

かおる 「おばあちゃん、なんか飛び込みでお客さんが来てるけど。泊まりたいって」
婆 「飛び込み？ こんなところに？」
かおる 「ね、こんなところに。で、どうする？」
婆 「2部屋しかねえからな。姉ちゃんの部屋は？ 東京行ったつきり、もう使ってないじゃろ」
かおる 「勝手に使ったら殺されるよ、この家が宿になってることすら知らないんだから」
婆 「じゃあ、そいつは婆と同衾だな。あ、加藤さんって来たか？」
かおる 「いや、まだ来てないけど。で、同衾ってなに？」
婆 「同じ布団で寝ることじゃ」
かおる 「ちよっとお婆ちゃん」
婆 「ひっひっひ」
かおる 「——わりとイケメンだったよ」
婆 「おおくそりゃ楽しみだ」
かおる 「冗談よもう。変なことやめてよね」
婆 「まあこの雨だけん、もう加藤さんも来れないかもだぜ。ちよっと電話してみてくれ。そこに番号載ってるだろ。とりあえずお客さんはお風呂にでも入ってもらって、休んでもらえ」
かおる 「うん」

かおる、宿帳をめくり、携帯電話でどこかに電話をかける。

かおる 「もしもし？ 加藤さんのお電話ですか？ あれ？ あ、こちらゲストハウス『ミカサ』です。」
カトゥ 「(電話：スペイン語で) もしもし、あれ、ちよっと電波、悪いな(アロ？アイ、ラセニャル 에스バハ)」
かおる 「あれ？ すいません、もしもし？」
カトゥ 「(電話：スペイン語で) もしもし、聞こえないな、雨のせい？ ごめんなさい。一回切ります(アロ？ エスクーチャ？ エスポルジュビア？ ロスイエント。ボイアコルガルウナベス)」
かおる 「もしもし？ あれ、切れた」
婆 「どうした？」
かおる 「なんか、混線してるみたいで、外国語みたいなのが聞こえて。それで、切れた」

かおる、かけなおすも、つながらない。

婆 「まっこと雨のせいだ」
かおる 「そんなことあるのかな」
婆 「さあな」

ふたりは居間の方へ向かう。

堤は宿に置いてある古い写真や古い漫画などをしげしげと眺めている。

婆 「らっしゃい！」

堤 「(婆の血まみれに驚きながら) ああ、突然すいません。今日って、ここに泊まることってできますか？」

婆 「俺と同衾でもいいなら」

堤 「動機？」

婆 「俺と一緒に寝るなら良いけど」

堤 「まじすか」

婆 「この雨だともう一人のお客はここにたどり着けないかもしれんけん、そんな時には泊まれっけどな」

堤 「でも、もし来たら」

婆 「ひっひっひ」

かおる 「来たら来たで、居間に布団を出しますから。ここにお泊まりください、布団、いっぱいありますから」

婆 「この部屋は出ないから大丈夫だ(幽霊の手をしながら)」

堤 「この部屋は？」

婆 「爺ちゃんの部屋は出るぞ」

かおる 「おばあちゃん」

婆 「居間は、起きたら布団の中に俺がいるかもしれん」

堤 「どっちにしろ怖いすね」

婆 「下は大火事、上は大水——ま、とりあえず、風呂入って来なんせ」

堤 「はい、ありがとうございます」

かおる 「あ、タオル！」

堤 「ああ、ありがとう、あぶないあぶない」

07：夜・居間

居間にあるちゃぶ台の周りには、田原、堤が座っている。ビールかなんかを飲んでいる。

田原はかつらを諦めたのか、禿げ上がった頭をさらけ出している。お酒を飲んだからか、頭頂部まで真っ赤だ。

堤は田原の髪型が気になって、猪鍋に集中できない。

鍋からは、婆が冒頭で胸に入れていた天恵菇が出てくる。美味しそうに食べる田原。

田原 「なにか？」

堤 「いや、さっきは、なんかすいませんでした」

田原 「ああ、いやいや、こちらこそお恥ずかしいところをお見せして」

堤 「いえいえ」

田原 「お遍路で？」

堤 「いや、たまたま」

田原 「たまたまこんなところに？」

堤 「はあ、なんか思うところあって」

田原 「(少しかっこつけて) 私は、もう長いことお遍路やってね。もし良かったら、話してみたらどうですか？」

堤 「いや、いいですいいです、そういうのいいです」

田原 「言にくいことなのかな？」

堤 「いや、そういうんじゃないんですけど」

田原 「若いうちはね、色んな人と話して、色んな考え方に触れた方が良いと思うよ、うん」

堤 「はあ」

田原 「僕は教師をやっているね、何百人もの生徒を見て来たから、君に教えられることもあるかもしれないよ」
堤 「いや、いいですよ、そういうのはちょっと」

田原 「今年の春に会った人はね、ひどいDVで奥さんを叩いてたんだね、それでぼくは言っちゃったんだよね、愛の大切さを。説いたね。説きまくった」

堤 「んー、でもその夫婦にも色々あるかもじゃないですか、個人的な事情が。そういうの、ちょっと立ち入りすぎって、いうか」

田原 「でも、暴力はいかんだろ、ダメ、絶対だろ」

堤 「あの、逆にお父さんは——お父さん？ おじさん？ はなんでお遍路に？」

田原 「ああ、田原です。田原俊宏、トシちゃんって呼んで」

堤 「(トシちゃんを無視して) 田原さんは、どうして？」

田原 「私はね、一言で言うと、——贖罪かな」

堤 「はあ(明らかにめんどくさそうな顔)」

田原、なんだか大仰に身の上話を始める。

中学校の数学教師をやっていたこと、教師一筋で家庭を顧みなかったこと、娘にも妻にも愛想をつかされていること。家に居場所がないこと。

かつては得意のダンスで子供達に人気だったが、今の子供達はぜんぜん興味がないこと。

髪が薄くなって来てからは生徒たちに馬鹿にされて、学級崩壊に二度なっていること。

職員室にも居場所がないこと。

「ハンサム先生」と呼ばれて調子に乗っていたが、

「髪が薄くて頭が『半分、寒い』、略されてハンサム」であることを知ったこと。

途中から涙ながらに語り始める。

支度を終えたかおるが、瓶ビールを持ってやってきて、座る。

ギャラリが増えたことにより、盛り上がり行って行く田原の話。

今の若いもんは、さとり世代はなっとらん、的な話題に。

婆もニヤニヤした顔で話を聞いている。堤はめんどくさそうにビールを飲んでる。

田原 「だから堤さんも、ばくに話してくれたら良いのに。ねえ」

かおる 「無理やり聞くのもアレじゃないですか」

堤 「田原さんになんて話しても意味ないですよ」

田原 「なんて」

堤 「だって、数学の教師でしょ」

田原 「そうだけど」

堤 「学校の先生って、生徒は変わるかもしれないけど、毎年同じこと教えてるじゃないですか」

田原 「基本的には、まあ」

堤 「ルートとか、三角関数とか、連立方程式とか。ああいうこと、なんの役にも立たないこと教えてて飽きな

いんですか？」

田原 「役に立たないってことはないでしょ」

堤 「それも毎年毎年同じこと教えてるわけでしょ、 π が3に変わるくらいでしょ」

かおる 「私、3でした」

田原 「数学の授業以外にも、学校の先生ってのは教えることあるよ？ 色々」

堤 「田原さんが教えられることって、『暴力はダメ』とか『愛が一番大事』とか、そういうことじゃないですか」

田原 「それは普遍なことじゃないか、人間の基本だよ」

堤 「普遍っていうか、不変じゃないですか、あ、変わらない方の不変じゃないですか、変わらざるの、レ点の方の」

田原 「どっちも同じような意味でしょ」

堤 「いやいや、変わらないものなんてないでしょ。時代がこんなに動いているのに、『暴力はダメ』とか『愛は一番大事』とか、つまんないっすよ」
かおる 「たしかに」

堤 「学校の外には、暴力振るわなくちゃいけない状況だってあるかもしれないし、愛よりも大切な何かを選
択をしないといけないこともあるんですよ。そういうの知らないでしょ、そういう時の対処法を教えて欲しいんで
すよ」

田原 「……」

かおる 「暴力振るわなくちゃいけない状況は、ありますね」

田原 「それ、妻にも言われました」

堤 「なんて？」

田原 「私、わりと資格を取るのが趣味っていうか、管理栄養士の資格を取ったり、スペイン語検定受けたり、気
象予報士の資格取ったり」

かおる 「それで資格とか、法律とか詳しいんですね」

田原 「はい、でも料理もしませんし、スペイン語で誰かと話したこともないんです」

かおる 「じゃあなんのための資格なの」

田原 「なにぶん知識だけあるもんだから、毎日の献立に関して妻にアドバイスをしてたんですね。今日のご飯に
はビタミンAが足りないねとか、ビタミンAにはプルーンが良いんだよ、とか、ビタミンAが不足すると暗いこ
ろで物が見えにくくなるよ、とか」

かおる 「うぎ」

田原 「今日は雨が降りそうだから洗濯はやめた方が良くとかアドバイスするわけです」

堤 「でも洗濯はしないでしょ」

田原 「はい」

堤 「よくDVされないで生きてこられましたね」

かおる 「それ、暴力振るわれなくちゃいけない状況ですよ、逆に」

田原 「でね、妻は聞くんですよ。『もし目が悪くなった時はどうするの？』『雨の日の部屋干しが臭くならないた
めにはどうするの？』って」

堤 「で、なんて答えるんですか？」

田原 「そうならないようにするのが管理栄養士であり、気象予報士であると答えました」

かおる 「ああ、わたしだったら蹴りますね」

田原 「スペイン語も、一緒に旅行に行く時に役立つかもって思ったんですが、『せっかくの旅行まであなたと一緒に
に行きたくない』って」

かおる 「でしょうね」

田原 「それでは私は一人でお遍路へ」

堤 「よく『愛が一番大事』とか言えたもんですね」

婆 「スペイン語使えるんならいろいろなやつと話せるのにな。わしだったら無線とかネットでスペイン人と出会
いたいぜ」

かおる 「すいません、おばあちゃん、出会い系マニアなんです」

堤 「マニア」

田原 「出会い系？」

かおる 「インターネットのSNSとか、マッチングアプリとかで男の人見つけて、すぐ仲良くなるの」

堤 「なんか、すげえっすね」

婆 「ネカマっていうか、ネババだな？ ん？ 逆か？」

田原 「そういうのどうなんですか？」

婆 「もう何十年も前から、アマチュア無線時代からやってるからな。元祖・出会い厨だな」

田原 「そういう出会いってどうなんだろう、ぼくはちょっと懐疑的です」

かおる 「友達もやってる子多いみたいですよ」
田原 「高校生も？」
かおる 「生徒さんもやってるんじゃないですか？ もしかしたら娘さんも」
堤 「今も昔も変わらないなあ」
婆 「良い女ぶって、色っぽいこと言って誘えば、すぐに釣れるわい」
堤 「プロだね」
かおる 「身内としては、聞きたくないような、聞きたいような」
田原 「詐欺じゃないか」
婆 「お前釣られてるぞ」
田原 「え？」
婆 「この宿、どこで知った？」
田原 「(思い出して) あ！ もしかして、『未亡人ハナコ』？ お遍路掲示板の」
婆 「わしだな」
田原 「なんだよ！ 同衾とか書いてあったから、てっきり、もう」

田原、禿げた頭を自分でピシヤリと叩く。そこがまた赤くなる。
婆はカラカラと笑っている。

堤 「これだから団塊ジュニアは、バブル世代は」
婆 「こいつ『ぼくはよく田原俊彦に似てるって言われます』って書いてたぜ」
かおる 「トレンドイはトレンドイでも、エンジェルっていうか」
田原 「(崩れ落ちる)」
かおる 「おばあちゃんはすごいね、なんでもかんでもやるね」
堤 「知識よりも実践だね。行動あるのみ」
かおる 「旅館業の資格もないのに宿を始めるし、建築の勉強もしたことないのに、露天風呂とか作っちゃうし」
田原 「違法ですけどね」
婆 「違法だからって、やらない理由にはならんぜ」
堤 「おお、先生よりも名言が」
婆 「YouTube みたらだいたいやり方わかるじゃろ」
堤 「コンピューターおばあちゃんだ」
婆 「いまはな、どぶろく作ってる」
田原 「それも違は——」
堤 「まじで？ 飲んでみたいです」
婆 「一杯千円な」

婆、厨房の冷蔵庫から何やらぶくぶく異様な泡を吹いている白い液体を持ってくる。
さつきかおるが飲んだやつだ。
一同、やや引くが、婆は嬉しそうにグラスになみなみとどぶろくを注いで行く。
「あ、ちょっとでいい、ちょっとで」 「わたしは、下戸なんで」 「なんか部族の儀式っぽい」とか言い訳をするが、
婆は完全に聞いていない。

婆 「酒飲みたかったら、もうこれしかねえぞ。コンビニもないからな」
かおる 「わたしは高校生だから」
婆 「お前こないだハタチになっただろ」
堤 「ハタチなのに女子高生？」

かおる 「(話を交えつつ) すごいにおい、肥料みたいな」

田原 「これも、違法ですよね」

婆 「まあ、さあ、グイッと」

一同、目をきつくつむりながら、グラスを開ける。グワ、脳が揺れる、言葉にできない、などの散々な感想。

——暗転

かおる 「わ、停電？」

08：深夜・居間(停電)

真つ暗闇。雨脚が強まり、窓がゴウンゴウンとなっている。

田原はスマートフォンライトを付けつつ、ずた袋の中から手探りでロウソクを取り出し、火を付けようとしているが、うまくつかない。

暗闇の中、かおるは婆に耳打ちをしてから、シーッと口に指を当て、堤を居間から連れ出す。

田原 「一応、お通路してますから、ロウソクはたくさん持ってるんです」

田原は怖いのか、明るく大きな声で誰かに話すが、居間にはもう誰もいなくなっている。

居間には、ラジオと卓上無線と、ハンデイトランシーバーがある。

田原はカメラマローンソクをテーブルの周りに立て、火をつける。

少し明るくなり、周りを見渡して、「あれ？ 誰もいない」と不思議がる。

婆は死角のラジオのところにおいてチューニングをいじっている。

元・おじいちゃんの部屋にいるかおると堤。居間から持ってきた電池式のトランシーバーを持っておもむくに喋り出す。

婆がチューニングを合わせると、トランシーバーをラジオで受信し、から声が聞こえる。

かおる 「(ラジオから) うららめしーやー」

田原 「？」

かおる 「(ラジオから) うららめしーやー」

田原 「ええ？ ええ？」

ラジオから、ノイズ混じりにかおるの声が聞こえる。婆のチューニングのせい、か、声質が気持ち悪くなっている。

かおる 「われはーおまえのー死んだ嫁であるー」

田原 「ちょっと、怖、なにに」

かおる 「お前はー洗濯もー料理もしないくせにー偉そうにしているー」

田原 「ちょっと、嫁、生きてる生きてる！」

かおる 「黙れー」

田原 「ひい」

かおる、堤にトランシーバーを渡す。

堤 「あとー半分ハゲてるー」

田原 「すみませんすみません！」
堤 「そして〜隠してる〜」
田原 「すみませんすみません！」

婆は田原のかつらをかぶって遊んでる。

かおる 「これからは洗濯すると誓うか？」

田原 「はい！」

堤 「これからは料理もすると誓うか？」

田原 「はい！」

かおる 「もうビタミンAのことを言わないって誓うか？」

田原 「はい！」

堤 「プルーンに誓うか？」

田原 「はい！ プルーンに誓います！ 中井貴一にも！」

婆、田原のかつらを七三分けにして、中井貴一っぽくしている。

ラジオから笑い声が聞こえてくる。元・おじいちゃんの部屋から、ランタンを持ってかおると堤が笑いながらやってくる。

ランタンに照らされた婆はかつらのせいで中井貴一っぽい髪型になっている。

田原 「うわ、やられた。なんだよ、もう」

かおる 「田原さんも暗いところ、見えてないじゃん」

堤 「ビタミンA摂らないと」

婆 「ミキプルーン」

婆はどぶろくをグラスに注ぎ、田原はふてくされながらグイと飲み干す。

田原のろうそくと、かおるが持って来たランタンの灯りで、ちょっとしたキャンプの夜みたいになっている。ラジオからは、災害情報が混線しながら途切れ途切れ聞こえてくる。

ラジオ 「記録的な大雨は—— いま、一部地域で停電が—— 神山町の山あいにお住いの方—— 土砂災害の危険がありますので、避難を——」

田原 「これはもう一人のお客さんは無理そうですね」

かおる 「この雨だと、国道からの道、封鎖されるんです」

堤 「ちなみに、もう一部屋っていうのは？」

かおる 「元・おばあちゃんの部屋です」

堤の表情が不意に曇る。

婆はポケットから携帯電話を取り出し、電話をかけている

婆 「もしもし、もしもし？ あれ、携帯もつながらなくなった」

かおる 「(自分の携帯を見て) あ、ほんとだ、圏外になってる」

堤 「この雨で近くの基地局がやられたんでしょうね」

田原 「基地局も停電になるのか」

婆 「加藤さん、まっこと残念だぜ」

かおる 「会ったことあるの？」
婆 「いや、会ったことはないんだけど、もしかしたら、知り合いかもしれん、アマチュア無線やってた頃の」
かおる 「おお、そうなんだ、それで勝負服なんだ」
堤 「そうなんですか、じゃあ来ない方が良くないかなんて言えないなあ。同衾も嫌だけど」
婆 「ツッチーはどうしてここに来た？」
堤 「ツッチー……。ココって遍路道なんですよね？ 地図に載ってる」
かおる 「ずいぶん昔にこのルートは廃止されましたよ。国道も通ったし、土砂崩れとかあるから危険だったことで」
堤 「地図が古かったのかな」
かおる 「もう何年も前の話ですよ？」
堤 「うーん」

堤、どぶろくをグイッと呷る。

堤 「俺が話したら、オーナーも話してくださいよ」
婆 「いいぜ。まるで百物語だな」
堤 「それ最後にお化けでるやつじゃん。あ、おじいちゃんの部屋、出るみたいですよ」
田原 「まあた、嘘でしょ」

田原はお化けが怖そうにしている。

堤 「おれは、もともとは東京の会社に勤めてて」
かおる 「なに、『vs東京』！」
堤 「（無視して） スマートフォンを売ってて、営業成績もそこそこ良かったんですよ、新人の頃は。で、仕事も楽しくって上司ともうまくやってて。でもある月からどんどん同期に抜かれていって、なんでだろうって思ってた」
田原 「うん」
堤 「で、共有サーバーに同期の売り上げのリストがあったから、こっそり見てみたんです。そしたら、そいつすごい量のらくらくのヤツ売ってて」
かおる 「お婆ちゃんが使ってるスマホだ」
婆 「ああ」

堤 「その数ヶ月後からめちゃくちゃクレームと返品が増えて『使い方がわからない』とか、『うちのおばあちゃんか3台もスマホ持ってる』とか」

田原 「ひどいなあ、半分騙してるみたいやついますよね」

堤 「まさにそれで。その処理に追われてすっげー忙しくなって、徹夜が続いていて。自分の仕事もしなくちゃいけないのに、大量のクレームと問い合わせ。会えなくなった彼女からも『私と仕事どっちが大事なの？』とか聞いてくるし。ベタに」

かおる 「言ってみたいセリフベスト3には入るやつだ」

田原 「彼氏いるの？」

かおる 「いないよ」

堤 「でも、たぶん途方にくれてるおじいちゃんおばあちゃんもいるだろうし、これまで取れてた連絡が取れなくなっちゃって不安なご家族もいるだろうし、そう考えたら仕事止められなくて」

田原 「えらいぞ、ツッチー。で、その同僚は？」

堤 「そのままらくらくフォン売りまくってて。他の同僚にも『ジジババは金持ってるし、らくらくつすよ』とか言ってる。色々カついてきて。そのうち、上司に『お前もあいつみたいにがんばれ』とか言われて、なんかもう無理だなんて」

かおる 「おばあちゃんをないがしろにするやつは許せない」

堤 「まあそれでなんやかんやあって、彼女とも別れて、会社も辞めて、もういいやって思って」
田原 「辞めちゃったんだ」
堤 「それで、まったく金なくなっちゃって、ど底辺での日々」
田原 「ああ、それでお遍路に」
堤 「いや、酔っ払った勢いで、同期の顧客リストから適当に電話して、たまたま出た適当な婆さんに、『俺だよ、オレオレ』って」
田原 「お？」
堤 「俺、仕事で失敗して、一億円損失作っちゃって、とりあえず五百万が手付金で今必要で、急ぎどこどこまで持ってきてくれないか』って言って」
かおる 「ベタだ」
堤 「そしたらすごいヨボヨボのお婆ちゃんが、ちゃんと持ってきてくれて。紙袋に五百万円入ってて」
田原 「そんな簡単に」
堤 「ほんとにらしくらくで、逆にすごい悲しくなっちゃって。そのお婆ちゃんの顔が忘れられなくて」
田原 「超違法、それ超違法ですよ」
堤 「知ってますよ。でも返しにいくのもなんだし、家にいてもいつ警察が来るかわからなくて眠れなくて。で、紙袋見たらこれが入ってたんすよ」

堤、ポケットの中からお遍路の地図を出す。とっても古いもので、ミカサの前を通るお遍路道が記載されている。

かおる 「ずいぶん古いね」
堤 「たぶん、あのばあさん、お金貯めていつかお遍路に行こうと思ってたのかな、って考えたらなんかいたたまれなくなっちゃって」
田原 「それで自分でお遍路を？」
堤 「そう、それでココに、なんとなく」
田原 「それって、ほんとの贖罪じゃないですか（羨ましそう）」
かおる 「なんでちょっとうらやましそうなんですか」
堤 「そういう時ってどうすれば良かったんですかね？ 先生」
田原 「ええ、それは難しいな」
堤 「ですよ」
かおる 「お婆あちゃんをいじめる人は許せない。通報します」
堤 「……うん」
かおる 「圏外！ よしじゃあケイシャーダをします」
田原 「ケイシャーダだな、それがいい。で、ケイシャーダってなんなの？」
婆 「まあそんな騙される婆も悪いな」
かおる 「なんでよ」
婆 「そんな年で金持ってもしょうがねえだろ。死んでも使えるわけじゃないんだし」
田原 「そう、でしょうか？」
婆 「こうやって代わりにお遍路回ってくれてるならおなじじゃねえか。自分で回らなくてよくなったから得したくらいだろ」
かおる 「ええ？ とりあえずケイシャーダは？ ちょっとやってみたかったんだけど」

かおるはカポエラの構えを取るが、誰も乗ってこないでフラフラ踊っているように見える。婆はそのリズムに合わせておもむろに阿波踊りのような踊りを踊り出す。
田原はふたりを見て「？」と思いつつも、酔っ払っているのかキレのあるダンスをする。

堤はよくわからないが、なんとなく持っていた箸で（銅を叩き）リズムを刻み始める。ダンスは加速していく。ろうそくの光に照らされて、なんとも言い難い時間が過ぎる。

堤 「え？ なにこれ、なにこの時間」

一同、我に返って。

田原 「出ましたね」

かおる 「ああ、これが（幽霊の手のポーズ）」

婆 「取り憑かれてたな」

田原 「百物語のせいですかね」

堤 「ぼくしか話してなくないですか？」

一同、喉が渴いたのか、どぶろくをグイッと飲んで、まずい！間違えた、やっちまったと呻く。

田原 「でも、なんか、癖になって来ました」

婆 「だろ？」

堤 「なんか、すいません。そんなかんじです」

婆 「ふん、じゃあ、次（かおるを指差す）」

田原 「そういえば、さっき、二十歳なのに女子高生だった」

堤 「その前に、名前ってなんているの？ おばあちゃんの孫なら、華山？」

かおる 「言いたくありません」

堤 「なんで」

かおる 「名前、嫌いなんです」

田原 「じゃあ、華山さん、お願いします——うーん、なんか締まらないな」

かおる 「私は、このおばあちゃんの孫で、今はちょっと先の家に両親と住んでるんですけど、このおばあちゃんとは裏腹に、結構お堅い家でした」

婆 「反面教師ってやつだな」

堤 「なんで自慢気なんですか」

かおる 「それで、ピアノとか、お茶とか、そういう娘に育てられて」

田原 「いいねえ大和撫子だ」

かおる 「でも学校で結構からかわれて、名前のせいで」

田原 「ああ、それで嫌いなんだ」

かおる 「大和撫子っぽいのは、あんまり役に立たないなって、それで護身術としてカポエラ習い始めて」

堤 「なぜまたカポエラ」

かおる 「動きがダンスみたいだから、親にバレないかなくて」

田原 「確か、カポエラの発祥もそんなかんじですよね、奴隷たちが看守にバレないようにって」

かおる 「名前の件なんですけど、なんか男子が読んでる漫画？ に出て来るキャラクターと同じ名前みたいで」

かおる、説明が難しいのか、本棚から「グラップラー刃牙」を取り出して、見せる。

ページを開くと、「花山薫」の名前がどーんと載っている。

堤 「ああ！ かおる！ 華山かおるか！」

かおる 「それで、高三の時に、しつこくいじってくる男子がいたから」

堤 「華山ハナに、花山薫か、『日本一の喧嘩師』だ」

かおる 「めちゃくちゃキレてケイシャーダを決めたんですね。後ろ回し蹴り」

かおる、立ち上がった後ろ回し蹴りを披露する。堤、笑いが止まる。

かおる 「もしたら、その子のアゴが割れちゃって、それで留年して」

かおる、花山薫が主人公のコミックを田原に渡す。田原、受け取って、吹き出すも、笑いをこらえる。

かおる 「もしたら、そのキャラクターが人気みたいで、そいつのスピノフはじまっちゃって。調子に乗ってからかって来た男子をまた病院送りにして、で、留年。で、ハタチ」

堤も息を飲む。

かおる 「こっちは田舎だから、私みたいな子あんまりなくて、みんなよそよそしくなって、息苦しくって。東京に行けば、紛れられるかなって思って、人多いし、私みたいな子もそこそこいるんじゃないかな、って。だから私、東京に行きたいんですね」

田原 「今まで生徒を何人も見てきましたが、カポエラやって同級生の顎を砕いた女の子は初めてみました」

堤 「『vs東京』じゃないじゃん」

かおる 「いや、東京行ってもカポエラは続けて、なんなら日本一になりたいなって。東京で一番になったら日本一になれるさ。ここでバイトしてお金稼いで、いつか東京に行こうかなって。武者修行です」

婆 「俺のことはほっといて、行ってこれば良いさ」

かおる 「一人残しては行けないよ。うちの親とも折り合い悪いんです、この人」

田原 「反面教師ですし」

堤 「ハンサム教師もいるし」

婆 「俺はここに残るぜ。待っている人がいるからな」

かおる 「誰よ」

婆 「加藤さんだ」

田原 「おお」

堤 「ついに」

婆 「それさ、ラジオの横にあるの、無線なんだけどさ」

かおる 「これ？」

婆 「そうだ。爺ちゃんが死ぬ前に、職場の人に勧められて買って来て、アマチュア無線やってたんだ。このあたりの山は無線が入りやすいらしくてな。爺ちゃんはいろんな人と交信してて、うらやましくて。俺は無免許だったんだけど、見よう見まねで覚えて、爺ちゃんが会社に行ってる間に、ずっと使ってたんだ」

田原 「無免許、それも違法ですよな」

婆 「昔は、無線なんてやってるのは若い衆が多くて、あんまり話の合う人がなくて、それではじめは年をサバ読んでやってて、おまえみたいなやつを良く騙して遊んでたんだ」

田原 「はあ」

堤 「それで？」

婆 「まあなんか、こんな山奥に住んでるだろ？ だから無線で知らない誰かとつながれるってのは楽しくてな。その時は今でいう携帯みたいな感じで、車で移動しながらアマチュア無線を使う人もいて、たまにお遍路に来る人と会ったりな」

田原 「『私をスキーに連れてって』とかでも使われてましたよね」

かおる 「今も昔も変わらないね」

婆 「それで十年くらい前に、ちょうど同い年の男の人と交信できてさ、珍しいんだ。それで、すんごい話が合うのさ。その人もお遍路してるって言うて。今日は何番札所だよ、今日はどこどこだよって、半年くらいは交信しててな」

堤 「へえ」

婆 「お遍路一周したらまたこっちにくるから会おうって約束してたんだけどな、なんかタイミング合わなくて。その人が地元に戻っても交信してたんだけども」

堤 「おお、会えたんですか？」

婆 「いや」

田原 「あら」

婆 「その後も、何年もずっと夜に無線を聞いてただけだよ。アマチュア無線自体、年々人が減ってきてな。

一人減り、二人減り。いまじゃもうノイズしか聞こえないんだよ。真っ暗な夜には、死ぬってこんなかんじなのかな、って思ったもんよ。寂しかったなあ」

かおる 「……」

婆 「爺ちゃんとは見合いで結婚してたからな。爺ちゃんは嫌いじゃないんだけど、他の男の人とも遊んでみたんだよ？ それで、未亡人だって嘘ついてて」

かおる 「不倫だ！」

婆 「ばっか、倫理なんてクソ食らえだよ。こちらら戦争やってっからな。時代時代で倫理も変わるんだよ。その時は、旧姓の三笠って名乗っててさ。いまは華山だから、向こうからは探せないだろう？」

堤 「なるほど、宿の名前は、あれですね、見つけやすいように」

婆 「去年、爺ちゃん死んだからな。晴れて未亡人になったわけだ。だから、ミカサって宿を作って、SNSで男に声かけまくって」

田原 「それでよく釣られたわけだ」

かおる 「でも、結局加藤さんから連絡きたんでしょ？」

婆 「ああ、片っぱしからネットに書きまくったからな、ネット経由で予約がきてたんだよ、すげえなネット」

かおる 「おお〜（拍手）」

田原 「おお〜（拍手）」

堤 「本人？」

婆 「わかんね。でもイニシャルは一緒だった。T・加藤。加藤タカヒロ」

かおる 「おおお！」

田原 「おおお！」

堤 「おおお！」

婆 「でもこの雨じゃな、来れんけんな」

婆、雨の様子を見るために窓を開ける。強い風が、ロウソクの火を消す。

あたりが真っ暗になる（ランタンの薄い明かりだけになる）。一同、わあとか短い悲鳴。

ラジオ、窓を開けた影響か、異常なノイズからうめき声のような音を発して、電源が落ちる。

どうやら電池が切れかけているようだ。

婆 「いまの爺さんの声に似てたな」

かおる 「それか、加藤さんって、もう、死んでるってことないよね？」

堤 「婆さんと一緒ならそこそこ良い歳だよな」

かおる 「なんか、百物語って、話し終わった最後は誰か知らない人が来るみたいなのやつですよね」

堤 「まだ百個も話してないよ」

かおる 「あれ、実は、10個でも良いみたいですよ」

田原 「ちょっと、やめてよ」

婆は少し冷静に、ラジオのチューニングを合わせている。
災害情報が聞こえる。

ラジオ 「記録的な大雨は—— いま、国道738号線は封鎖、外出はお控えください。道や——など、危険なものを
見つけた際にはレスキュー隊まで——」

ラジオの音が、ノイズやディストーションでおどろおどろしく聞こえる。
田原 田原だけではなく、一同、ちょっと怖くなる。

堤 「(努めて明るく) そういえば、さっき落ち武者みたいな霊を見た記憶がある」
かおる 「わたしもみた」

田原 「それ、わたしのことですか？」

かおる 「しかもなんか全裸だった、キモかった」

田原 「わたしのことですよ」

堤 「なぜか頭が二つあった、股間に」

田原 「(遮って) そういえば、血まみれの料理人を見た記憶が」

堤 「血まみれ？」

田原 「大きな包丁を持って、今日のおかずはお前だって、私に」

堤 「見たの？ まじで？」

かおる 「それはね、そこにいる、そこでチューニングいじってる人」

風もないのに、ランタンの灯りがチラつく。

一同、そっちの方向を見た瞬間に、おじいちゃんの部屋の窓がどんと叩かれる。

田原 「によっ(変な声)」

堤 「うそ、まじか」

田原 「ほんとに出てるじゃないですか」

堤 「浮気しようとしている婆さんを怒っているのかも」

かおる 「おじいちゃん死んでるからもう浮気じゃないじゃないですか」

しばらくすると、深夜の客はガチャガチャとノブを回し、玄関に入って来る。

ランタンの灯りが薄く客の顔を照らす。雷がなる。

客の影のシルエットは雷様のような不思議な頭をしている。

09：深夜・居間(停電)

加藤 「オソクナッテスイマセン、カトゥデス」

一同は、状況が飲み込めず、ポカンとしている。

かおる 「こ、こんばんわ」

加藤 「チャイム、鳴らなくて」

かおる 「ああ。ええと、加藤さん？」

加藤 「ハイ、カトゥです」

かおる 「カトウさん？」

加藤 「カトウ・マルティネス・トーレスです」

かおる 「？」

堤 「ええと、加藤さんじゃなくて、カトウさんってこと？」

加藤 「はい、コロンビアから来ました」

婆 「まっこと驚いたぜ」

堤 「それにしても、すげー頭」

田原 「雷様みたいですね」

婆 「良く来てくれたな。とりあえず、飲め」

婆はどぶろくをグラスに注ぐ。

カトウ（加藤）は荷物を起き、囲炉裏側に腰を下ろし、どぶろくを飲み干し、目を白黒させる。

カトウ 「おお、すごいです。お大師さまに会えそうな気がしました」

婆は爆笑している。

婆 「これはこれで面白いぜ」

10：深夜・居間（停電↓少し復旧）

カトウはぐいぐいとどぶろくを飲み干している。

堤 「クセになるだろ。カトウ、それ、いっぱい千円だぞ、結構するぞ」

カトウ 「はい、大丈夫です。ツッチーもトツシーも良かったらどうぞ、ぼくおごります」

田原 「いや、俺は——いや、飲む！」

堤 「よし、こうなったら飲むか！」

男たちはどぶろくを酌み交わす。

かおる 「なんか、変な夜だね」

婆 「宿の初日がこれだと、今後どうなるかわからんな」

かおる 「ねえねえ、カトウさんはなんでここに来たの」

カトウ 「ボク、巡礼が好きで、趣味です。コロンビアには、ラス・ラハス教会というのがあります。若い頃行きました。行って感動しました。世界一美しい教会です」

田原 「ラス・ラハス。嫁のガイドブックに載ってた気がする。すごい山奥に建てられたやつだ」

カトウ 「そうです！ほんとに、ここみたいな山奥に、突然巨大な教会があります。ボクはスポーツをやっている、大きな怪我をしちゃって。その教会は、“奇跡の治癒場”と呼ばれていて、どうしてもお参りしたかった。」

堤 「へえ、治癒場」

田原 「四国遍路にもそういう伝説、ありますよね」

かおる 「ありますね、動かなかった足が動いたとか」

カトウ 「はい。それで、嘘みたいにボクの怪我也治って、それで、大きなクラブチームから誘いがあった。」

堤 「え、すげえじゃん。スポーツ選手なんだ」

カトウ 「はい。それから、調子が悪くなると巡礼に行くようになって、心落ち着きます」

田原 「そうなんだ」

カトウ 「いまはスペインに住んでるんですが、サンティアゴ・デ・コンポステーラっていう巡礼の道があって、そこも素晴らしくて、その終着地点で、四国のお遍路のことを知って」

かおる 「そんなところでプロモーションしてるんですね」

堤 「でも、こっち来てるってことは、今も調子が悪いってこと？」

カトウ 「実はそうなんですよね……」

堤 「そもそも、なんでここに。ここって遍路道（へんろみち）からかなり離れてるだろう？」

カトウ 「インターネットで調べてたら、MICAASAって」

田原 「……ああー！」

かおる 「？」

田原 「ミ、カサ。スペイン語で、私の家、って意味です。マイ、ホーム」

カトウ 「自宅みたいに寛げる宿に泊まりたいなって」

婆 「お前ツイてるな。あたりだぜ」

婆が笑い出すと、雷が鳴る。

ランタンの灯りが消え、真っ暗になるが、少しすると電力が復旧したのか灯りがつく。

とはいえ、完全には復旧していないのか、非常用のライトだけが灯っている。光は弱い。

堤はカトウの顔をまじまじと見る。

堤 「え？ あれ？ カトウって、カトウ？ バルサのエースストライカー、カトウじゃないの？」

ラジオが再び動き出す。

ラジオ 「サッカーの話題です。スペインリーグ、有名チームのエースストライカーが行方不明となり、捜索願いが出されました。2日後に控えたライバルチームとの一戦を前に、チームは混乱状態だということです。サポーターは、

ライバルチームのサポーターの溜まり場を放火するなど、異常な事態になっています」

カトウ 「はい、ちょっと調子悪くて、内緒で日本に」

ラジオ 「カトウ選手は、先シーズンはリーグ得点王を獲得するなど活躍しましたが、今シーズンは未だ無得点。

ライバルチームのサポーターは、カトウ選手がボールを持つたびにモンキー・チャントをするなどしてプレイを妨害。その結果、サポーター同士の小競り合いは絶えず——」

婆はそつとラジオのポリウムを絞る。

カトウ 「まあそうなんです。今年は全然ダメで」

かおる 「モンキー・チャントってなに？」

堤 「（言いくそうに）外国人がボールを持つたびにだな、こう、キーキー猿の真似をするんですよ」

かおる 「なんで？」

田原 「まあ、人種差別ですよ。この猿め！ ってことです」

かおる 「まじか、ひどいね」

堤 「何万人の人にキーキー言われると、そりゃ調子も悪くなるよな」

田原 「でも、君、帰らないとまずいんじゃないの？ 大きな試合、控えてるんでしょ？」

カトウ 「今、帰っても、何にもできないです」

かおる 「いいの？」

カトウ 「こ、治らないと、帰れません（カトウは胸のあたりを抑える）」

堤 「まあ、気持ちはわかるよ、飲もうぜ」

カトウ 「はい」

傷つくもの同士、堤とカトウは酒を酌み交わす。

田原 「良いのかなあ、ほんとうに」

かおる 「田原さん、先生でしょ、説いてくださいよ、なにかを」

田原 「え〜」

田原、カトウに向き直る。

田原 「カトウさん、あんたね、ファンが待ってるんでしょ、帰ったらどう」

カトウ 「はい、でも、帰ってもなにもできないです。キーキー言われたり、ピーナッツ投げられたりすると、腹が立つし、足がすくんで」

田原 「差別なんかに負けちゃダメだよ」

カトウ 「でも、5万人の観客にブーイングされるの、されたことのない人にはたぶんわからないです」

田原 「まあ、そうだけど、そうだね、うん」

かおる 「ちょっと田原先生！」

カトウはまたどぶろくを飲み干している。

婆はカトウの頭をやさしく撫でると、ピーナッツが見つかり、美味しそうに食べる。

婆 「異国の味だぜ」

カトウ 「とつても、怖いです」

堤 「まあ怖いだろうなあ」

カトウ 「お遍路回って、お大師さまに心、治してもらったら——」

婆が立ち上がり、そっと電気のスイッチを消す。

再び、真っ暗闇。

一同が困惑している中、婆はトランシーバーを握り、ラジオのチューニングをいじり、元・おじいちゃんの部屋に忍び込む。

婆 「加藤よ、我が名は空海」

カトウ 「はい？」

婆 「繰り返す、我が名は空海。お前の心に直接話しかけている」

カトウ 「お大師さま？」

婆 「そうだ。お前だけに聞こえるように話しかけている」

かおる、一番先に意図を察し、堤と田原に目配せする

かおる 「(話を合わせて) どうしました？」

堤 「(話を合わせて) え？ 聞こえないなあ」

田原 「(話を合わせて) え？ どうしました？ 聞こえないなあ」

カトウ 「いま、お大師さまが、ボクの心に」

婆 「心頭滅却すれば火もまた涼し、心を鍛えれば5万人の野次など恐るるに足らぬ。知能を持った猿こそが、

人間『ホモ・サピエンス』ならば、知能も礼儀も持たぬ人間はただの猿だ。『猿は人間に毛が三筋足らぬ』と申すではないか。聞け、この山で猿が鳴いている声を、お前はその声に心が痛むと申すか」

しかし山はとても静かである。

暗闇に紛れ、田原、堤、かおるは隠れて「キーキー」と鳴く。
カトウはそれを耳をすませて聞いている。

婆 「いいか、加藤。行動こそが相手を変える手段だ。お前が変わり、活躍し、猿を人間にしてやってくれ」
カトウ 「ぼくが」

婆 「そうだ、お前の活躍によって、猿どもは自分の無能さに気づくだろう。行動でしか人は変わらん」
カトウ 「はい……。ありがとうございます」

婆 「よし、いま、お前の心は癒された」

かおる、タミング良く電気をつける。再び仄かに電灯が灯る。

堤 「(白々しく) どうした、カトウ」

田原 「どうしました？」

カトウ 「はい、ぼく、なんだか、治りました」

かおる 「おおく良かった良かった、うん、見た目から治ったのが伝わるね。治ったよ」

カトウ 「はい。もう、戦えます。猿を人間に戻すのが、ぼくの使命です。もう負けない」

堤 「これでもう大丈夫だね」

カトウ 「はい。で、あの、『猿は人間に毛が三筋足らぬ』って、どういう意味ですか」

田原 「ええと、猿は利口だが、人間よりも毛が少ないので、知恵が及ばない、っていう意味ですね」

カトウ 「(田原の毛を見て) なるほど」

婆 「加藤、お前、風呂入って来い。襦だ」

カトウ 「ミンギ……はい！」

カトウはお風呂へ向かい、かおるはカトウを案内しつつ、タオルを忘れずに渡す。

堤 「帰る気になったとしても、この時間にこの山の中じゃ、どうやって帰せばいいんだよ」

田原 「ここから国道まで歩いて6時間、国道で車拾えたとしても、空港まで4時間、空港から羽田まで1時間、羽田から確か、15時間くらいだな。バルセロナまで」

かおる 「よく知ってますね」

田原 「行ったことないけどね。嫁のガイドブックで」

堤 「時差もあるだろ」

田原 「7時間ですね」

かおる 「田原さんが初めて人の役に立ってるような気がしてきました」

田原 「役に立ったのは嫁のガイドブックだけだね」

堤 「てことは、いま出ればなんとか間に合うの？」

田原 「キックオフって夜ですよ。始発の東京行きの飛行機に乗れば、なんとか間に合うんじゃないですかね」

かおる 「でもどうやって？ さすがに夜明けまでは山道歩けないでしょ、歩いてもかなりかかるよ？」

堤 「遍路ころがしたもんな、結構きついな」

婆 「裏に通学用の道があって、そこ通ればちょっと急だけど、国道には出れるぜ」

田原 「でも夜道を転んで足とか怪我したら元も子もないですよ」

かおる 「なんかワイヤーとか貼って、ピューって行けないもんですかね」

堤 「あ」

かおる 「え？」

堤 「いや、ないない」

かおる 「なんですか？ 言ってみてくださいよ」

堤 「いやいや」

かおる 「言うだけならタダですから」

堤 「お風呂のさ、ドラム缶あるじゃん。あれに詰めてさ、ゴロゴロって」

かおる 「お？」

堤 「ないない、怪我するよ。年俸何億とかでしょ、怖い怖い。なんかあったら払えないもん、俺」

かおる 「布団詰めたら？ うち、布団たくさんあるって」

堤 「お？」

かおる 「なんちゃって」

田原 「国道までの距離が短くって、角度がそんなに無ければいけるんじゃないでしょうか」

堤 「え？」

かおる 「お？」

田原 「衝撃が少なければ行けますよね」

かおる 「いやいや、結構急だよ？」

堤 「結構急だよ」

田原 「急だけど、距離が短ければ、加速しないし、その分衝撃も少ないし」

堤 「トシちゃん、三角関数」

田原 「あ」

かおる 「ついに！」

堤 「ついに火を噴く三角関数！」

田原 「お！ ついに！ トシちゃん、びんびんになってきた！」

かおる 「田原さんは毛はないけど、もう立派な人間！」

田原、窓の外を眺めながら、御朱印帳を開き、なにやら計算を始める。

かおる 「後はなに？」

堤 「国道まで出ても、そこからどうする？ 空港までどうやって行くのさ」

かおる 「うーん、さっきなんか聞いた気がするのにな」

堤 「聞いた？」

かおる 「うーん——あ、レスキュー隊！ レスキュー隊がこの辺に来てるって言ってた」

堤 「(携帯を取り出し) いや、ダメだ、圏外だよ」

かおる 「私のもだ」

婆 「おお、そうだそうだ」

婆は居間の卓上無線を起動させる。

婆はチューニングを合わせ、交信を始める。

婆 「非常、非常、非常。こちらは、J95HNH。非常、非常、非常。こちらは、J95HNH、べつぎ」

かおる 「つながらない？」

堤 「頼むよ」

婆 「非常、非常、非常。こちらは、J95HNH。非常、非常、非常。こちらは、J95HNH、べつぎ」

無線から、ノイズ混じりで声が聞こえる。

無線 「(ノイズ混じりで声が聞こえる) J95HNH、J95HNH。こっぴ J95SDC、こっぴ J95SDC、べつぎ」

かおる 「つながった!？」

堤 「やった!」

婆 「こちらは、J95ENGINE、未亡人ハナ。徳島県の神山でゲストハウスを経営するもの」

堤 「やっぱりそのハンドルネームなんだ」

婆 「宿泊客が泡吹いて倒れた、携帯不通により連絡が取れないので、至急レスキューに連絡されたし。神領（じりんりょう）小学校近くの国道付近にて。目印はドラム缶。伝達を頼む。宿泊客は外国人にて、至急本国での処置が必要とのこと。空港へ緊急搬出願う。これは偶然居合わせた先生からの指示である」

しばらく間があって（相手が携帯でレスキューに連絡している）、レスキューが30分後に向かうとの回答。

婆 「ありがとう、助かる」

堤 「先生は先生でも数学の先生だけだな」

かおる 「よし!」

婆 「つながるなんてびっくりしたぜ、やってみるもんだな」

田原 「30分って、間に合う?」

堤 「間に合わせて!」

カトウが脱いだ服のポケットの中の携帯電話が鳴る。

かおる 「あれ? なんで繋がるの?」

堤 「SIMの問題?」

かおる 「出てよ」

堤 「いや、なんでだよ」

かおる 「出てよー」

堤 「ちっ、もしもし」

相手はスペイン語でなにやら話している。

堤、スピーカーモードにしてみんなに聞かせる。

堤 「なに言ってるんだろう?」

電話 「(スペイン語で) カトウ、今どこにいる? すぐに戻ってきてくれ、試合に出てくれないと困る! クラシ

コダゾ!(カトウ、ドンデエスタサアオラ? ブエルベフロントアキー! スインティノポデモサセルナ

ダ! エスエルクラスイコエー!」

田原 「クラブチームの人っぽいですね、頼むから出場してくれとかそんなことかも」

堤 「だって、控え選手とか結構いるんじゃないの?」

田原 「(スペイン語で)今から向かうけど、間に合うかわからない。控えの選手、準備させておいて(ポイパラアヤー

アオラ、ペロノセスイジエゴアティエンポ。ケセプレパーレアルギエン)」

電話 「(スペイン語で)怪我しちゃって、FWが誰もいないんだよ(ノアイニンングンデランテロー、エスケセレスイ
オナーロンエンラプラクティカ)」

田原 「なんか、練習で控えの選手が怪我したとか言ってますね」

かおる 「ヤバイじゃん」

田原 「負けたらきつと荒れますよね、サポーター」

堤 「トシちゃん、ちょっと訳してほしいんだけど」

田原 「え?」

堤 「(耳打ちで田原になにやら伝えている) もしもし、もしもし、私たちはカトウを保護している。返して欲し

ければ、約束しろ。加藤を無事に戻すから、1ゴールごとに五百万くれ」

田原 「マジですか？ えーと……」

田原 「(スペイン語で) もしもし、もしもし、私たちはカトウを保護している。返して欲しければ、約束しろ。加藤を無事に戻すから、1ゴールごとに五百万くれ(オラ? オラ? カトウ エスタ コンノソトロス。スイケレイ スケオスロデボルバモス、アガモスウントラート。ケノスパゲイススインコミジョン カダウンゴル スイオスデボルベモスカトウビーボ)」

堤は田原と協力して、クラブチームの幹部のような人とスペイン語でなにやら話している。

「(五百万、1ゴールにつき(スインコミジョン。カダウンゴル)」

「(振込先は) 後でメールする(オスロエンピアモスコレオマスタルデ)」

「約束だぞ。じゃあな(トラトエチヨアディオス) など」

相手は「オーケー、オーケーそのかわり絶対に間に合うように戻ってこい」と言いながら、最後は合意を得たようだ。

かおる 「なに話してたの?」

堤 「カトウがクラブに戻って、ゴールを決めたら1ゴールにつき五百万円、口座に振り込むようになって」

かおる 「なにそれ、誰の口座?」

堤 「まあ、ほら、前に借りちゃったから」

堤は古い地図をポケットから取り出す

かおる 「へえー。(うれしそうに) オラオラ詐欺だ、きつと世界初だよ」

堤 「無事に送り届けて、たくさんゴールしてもらって、そしたら山分けだ」

露天風呂の方からキーと本物の猿の声がして、カトウの笑い声がする。
そのままカトウが全裸で微笑みをたたえてやって来る。

カトウ 「もう大丈夫です。ボクは、治癒しました。完全復活です、猿とも、もう友達です」

堤 「まじか」

婆 「よし、行くぞ。40秒で支度しな」

11：夜明け前

一同は協力して準備をしている。かおるは布団を運び、ドラム缶に詰めている。
縁側からどうやってドラム缶を外に転がすかを田原は計算している。

堤は、家にあったレゴブロックのようなもので、模型を作って流れをカトウに説明している。

田原 「なにか、角度をつけるものがあればなあ、ここから勢いをつけて、通学路まで行けるのに」

堤 「それにしても露天風呂に猿が入って来たって、まじかよ」

カトウ 「猿とお風呂に入ったら、猿も悪くないなって思いました。もう負けません」

婆 「いいか、カトウ、相手を出し抜け。猿にルールなんて関係ないからな」

カトウ 「はい。心に刻みます」

かおる 「間に合うの? レスキュー隊来ちゃうよ。誰もいなかったらいたずらだと思って帰っちゃうよ」
田原 「ここから通学路まで転がすのが難しいんですよ、なんか平らな板みたいなのがあれば……」

婆 「かおる、脱衣所、ぶっ壊せ」
かおる 「え？ だって、せっかく作ったのに」
婆 「だって、もう風呂なくなるぜ」
かおる 「あ、そっか」

かおるは脱衣所の板をケイシャーダで蹴り破り、電動ベッドの先に坂のようにして取り付ける。
カトウは宇宙に行くパイロットのようにフルフェイスのヘルメットをかぶり、ドラム缶の中に入る。
田原は何か思いついて、元・おじいさんの部屋から電動ベッドを持って来て、スイッチで角度を調整するが、不安定な電力のためにうまくいかない。

かおる 「まだ？ もうレスキュー隊来ちゃうよ」
田原 「電気が不安定で、うまく角度をセッティングできないんですよ」
堤 「頼むぜ先生」
カトウ 「すいません、私のために、みんなで」
堤 「いいから絶対に点、決めてくれよ」
かおる 「あと一分で来ちゃう〜」

その時、雷鳴が鳴り響き、電動ベッドの角度が、ウイーンと上がる。

田原 「よし！もうちょい」
堤 「カトウ、準備だ」
かおる 「気をつけてね」

堤と田原はドラム缶を持ち上げ、電動ベッドの背のところにセットする。
婆はどぶろくを持ってきて「忘れてた」とカトウの口に流し込む。
雷鳴が轟き、田原の微妙な操作により、電動ベッドの背もたれが再び動き出し、狙いの角度に――

田原 「よし、バックトゥザ……」
婆は田原の掛け声を無視してドラム缶を押し出す。
雷鳴とともに、ドラム缶は美しく転がり、縁側から外へと転がって行く。
一同はその姿をこぶしを握って見送る。ドラム缶はうまく通学路の入り口に差し掛かり、視界から消える。
放心する一同。

しばらくして、無線から声が聞こえる。

無線 「レスキューより連絡あり、□から泡を吹いた男、無事に国道沿いで回収。このまま空港へ向かうとのこと」
一同、歓声、その後、ぐったりと囲炉裏の周りに寝転がる。

かおる 「ふわあ、うまく行った、良かった、おやすみ」

暗転

後日のミカサ。

婆が卓上無線で誰かと話している。

かおる 「おばあちゃん、ブラジルってスペイン語じゃなくて、ポルトガル語なのよ」

婆 「はっは。まあ似たようなもんだろ」

かおる 「ハンサム田原があんまり役に立たなかったから、昨日から一人でラス・ラハスに行かせた」

婆 「かおるはどうだ？」

かおる 「うん、だいじょうぶだし、楽しいよ！ カポエラもだいぶ強くなった。このままだとマジで日本一になれるかもしれない」

婆 「東京すっ飛ばして、地球の裏側だもんな」

かおる 「うん、道場の人もやさしいし。そっちはどう？」

婆 「ああ、堤が旅館業の許可とったから、ゲストハウス・ミカサも再開するぜ。」

かおる 「ツッチー、お姉ちゃんとはうまくいってるの？」

婆 「ああ、なんか良い感じだな、あいつわりとイケメンだからな」

かおる 「良かったら、おばあちゃんも、もう安心だね」

婆 「まあな、明日から、スペイン行って来るぜ」

かおる 「まじで？」

婆 「カトゥな、あいつ、おじいちゃんが日系人なんだってよ」

かおる 「だから日本語できたんだ」

婆 「それでな、爺さんってのが、俺と同年みたいなんだよな」

かおる 「え？」

婆 「だからさ、これから会いに行行って来るぜ」

かおる 「まじで？ その人——」

かおるの声は、ノイズの中に飲み込まれる。

婆はスイッチを切って、お出かけ用の帽子をかぶり、天恵菇をカバンに忍ばせる。

卓上無線機の前には、「カトゥ完全復活！ 大一番で怒涛のハットトリック。ライバルサポーターを黙らせた、キツイホームでのおもてなし」などの新聞の切り抜きが。

堤 「ただいま〜」

ゲストハウス・ミカサの扉が開く。